

追悼

大澤先生の思い出

望月 幸義

大澤先生は非常に立派な人であった。戦後、モラロジー研究所が活動を再開し、今日の活動を展開するに至った草創期のモラロジーの基礎を固めた人といえるのではないだろうか。それだけ二代目所長廣池千英先生の信頼も厚かったようである。また、精神伝統の心を心として尽力されたのである。

大澤先生は、廣池千英先生、千太郎先生、幹堂先生に任せ、そのご意志を体して、編集部長、研究部長、開発部長、モラロジー専攻塾塾頭、麗澤大学副学長などを歴任し、モラロジー研究所ならびに廣池学園の中心となって、絶大な活躍をされました。

したがって、千英先生、千太郎先生、幹堂先生との思い出話も多く、それが一番大澤先生にとっては懐かしいものであったことは、推測できるが、私はよく知らないもので、そのことについて何も話せないのが残念である。

大澤先生は、京都大学文学部哲学科で教育哲学を専攻した。大学時代、悩みごとがあったらしく、学校に行かない日がかかなり長く続いたようです。その時、主任教授であった下程勇吉先生から手紙をもらい、それ

がきっかけて復帰し、無事卒業しました。そのため、終生下程先生を恩人として至誠を尽くされました。後に、下程先生が大学を退職後、モラロジー研究所に来られるようになったのも、大澤先生のご尽力によるものでした。

大澤先生は、昔の京都大学の学生らしく、哲学、教育学、文学などの代表的な書物に通じておられた。西田幾多郎、田辺元、和辻哲郎、三木清、阿部次郎、正木正などの話が思い出される。また、当時流行していたマルクスの著作も読んでおられたようです。文学書もかなり読んでおられました。内村鑑三の『後世への最大遺物』の話は、たびたび聞かされました。また、森昭の教育に関する書物を推薦してくれたのを覚えています。

ボルノー、ラワリーズ、ランゲフェルト、デルボラフ、ドレイヤーなどの著名な教育学者を招いて、研究会を開催したのは、大澤先生が最初ではないだろうか。

大きな業績の一つは、廣池博士の遺稿の整理である。廣池博士の一七万枚の遺稿の大半が、『資料集』として整理されたのは、大澤先生が研究部長の時代であった。これは『伝記廣池千九郎』の編纂の際に大変役に立ちました。また、『伝記』も、大澤先生の支えがあって完成したものだといえるでしょう。

日本の著名な学者を招き、廣池博士の遺稿の顕彰をしたことも、特筆してよいでしょう。同志社大学の内田智雄先生には、『倭漢比較律疏』ならびに『大糖六典』の校訂をしていただきました。利光三津夫先生、阿南成一先生などもあります。

私は、大澤先生には、これまで公私にわたり数え切れないほど多くの恩恵を受けています。私が大澤先生に初めてお会いしたのは、外務省を辞めて、東京大学の倫理学科に通い出した頃であったと記憶していま

す。二十八、二十九歳の頃でした。当時、私は東京の新小岩事務所に所属し、モラロジの勉強をしています。その頃、新小岩の先輩から東京全体の青年を対象とした研究会に参加しないかと誘われ、参加することになりました。『道徳科学の論文』の研究会で、大澤俊夫先生が指導しておられました。何回目かに、私が発表当番に当たり、『論文』四冊目の革命についての箇所をまとめて報告したところ、大澤先生が大変褒めて下さいました。とても嬉しかったのと、モラロジ学習の励みとなりました。

その後、大澤先生から、モラロジ研究所に招かれて、北川治男氏と岩佐信道氏と共に、食事をご馳走になりました。その時の話の内容は忘れてしまいました。そんなことが二、三回あった後、私が東京大学文学部の大学院に入学した年の秋に、先生から研究部に来ないかとお誘いを受けました。そして、研究部から通学させてもらうことになりました。

研究部に入ってから、大澤先生からさまざまな課題を与えられ、育てて頂きました。また先生とご一緒にいろいろとお仕事をさせてもらうことも多かったのです。委員会の仕事として『廣池千九郎語録』の編集、研究部に入ってから、大澤先生からさまざまな課題を与えられ、育てて頂きました。また先生とご一緒にいろいろとお仕事をさせてもらうことも多かったのです。委員会の仕事として『廣池千九郎語録』の編集、『モラロジ概説』の編集、『モラロジ用語事典』の編集、『道徳科学の論文』の改訂、『伝記廣池千九郎』の編集などがありました。これらの編集は、すべて大澤先生を中心に進められたのであり、それによって私のモラロジに対する見識が高められたのは、先生のご指導の賜物と深く感謝しています。これらの編集作業のため、博士ゆかりの信州上田のたまりや旅館を数回訪れることができたことも、懐かしい思い出となっています。

先生は、若手の研究員を集めて、毎月一回、自宅で廣池博士の著作を学ぶ研究会を開いて下さいました。これは十年以上も続き、これにより博士の著作を通読できましたことは、私の貴重な財産となっています。

私が三十二、三十三歳の頃、廣池千太郎先生が釈迦の事跡を見学するため、インド旅行をされた際、大澤先生とご一緒に参加させて頂きました。中村元先生ご夫妻が同道くださり、モラロジアン二十数名が同行しました。私の初めての海外旅行であり、苦勞も多かったが、忘れ難い思い出となっています。

大澤先生は、研究部へ優秀な人材をたくさん集めて来られ、育ててくださいました。それは今思うと、一種の才能でした。人の長所をほめるのが上手で、次から次へ仕事を与えたのです。一面厳しい面もあり、近寄りがたかった。ある人は、人を緊張させる人であったといえます。

料理については、グルメでした。グルメは、今は当たり前になりましたが、当時は珍しかった。見知らぬ土地に旅行した時などは、その土地の人においしい店はどこか聞いて、その店で食べるのが常でした。先生はいつも、「君子は食味に通ず」とおっしゃられて、和食、そば、鮎、てんぷらなど、いろいろとおいしい料理をご馳走して下さいました。この点も学ばせて頂かなければと、反省しております。

また、お酒が強かった。いくら飲んでも、決して乱れることはなかった。お酒の席で、みんなが歌を歌っても、減多にマイクを取ることがなかった。やむを得ず歌わなければならない時には、いつも「湖畔の宿」を歌いました。「黒田節」も何度か聞いたことがあります。

長年にわたって、先生の下で、研究その他の活動をさせて頂いたことは、身にあまる幸せと思います。しかし、大澤先生の温かいご指導を頂きながら、先生のご期待に添える人間に成長したのかどうかを考える、忸怩たるものがあります。